

圏央道（境古河 IC ～つくば中央 IC） の開通の効果

国土交通省関東地方整備局
北首都国道事務所
常総国道事務所

はじめに

首都圏中央連絡自動車道（以下「圏央道」という）は、都心から半径およそ 40～60 km の位置に計画された、延長約 300 km の高規格幹線道路である。圏央道は、首都高中央環状線、東京外かく環状道路、東京湾アクアラインなどと一体となって首都圏の広域的な幹線道路網を形成する首都圏 3 環状道路のうち、一番外側に位置し、横浜、厚木、八王子、川越、つくば、成田、木更津などの都市を連絡する道路である（図-1）。

圏央道は全長約 300 km のうち、これまでに約 8 割にあたる区間が開通していたが、今回、境古河 IC からつくば中央 IC 間約 28.5 km が開通（図-2、写真-1～4）したことで全体の約 9 割にあたる約 270 km が開通済みとなった。



図-1 全体位置図

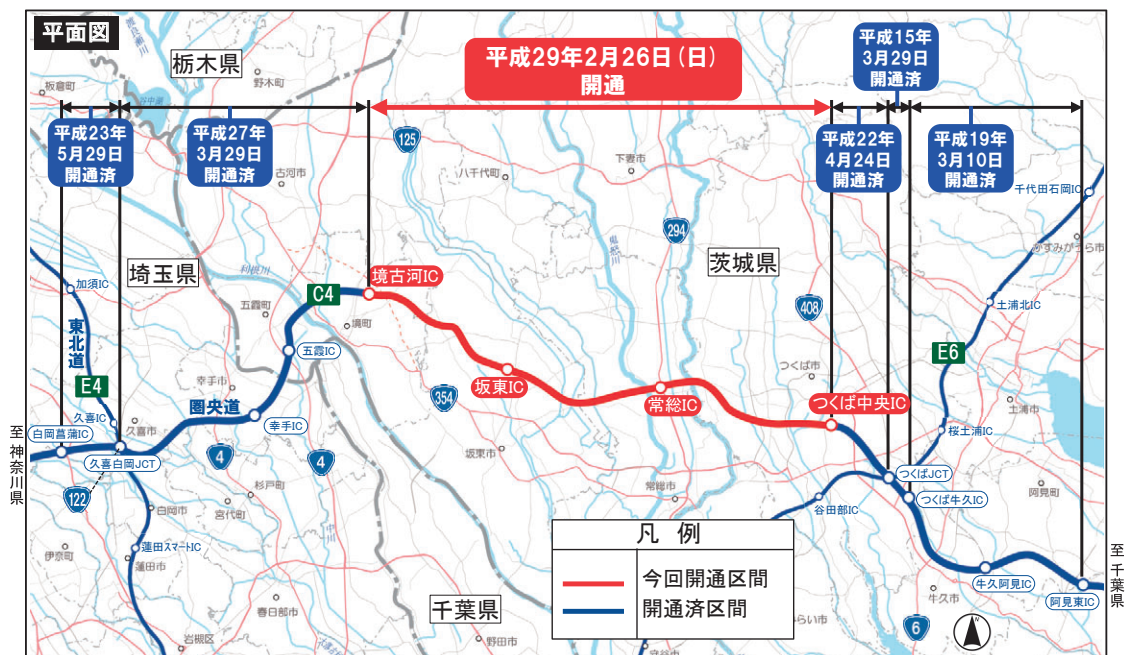


図-2 今回開通区間平面図

これにより、東名高速、中央道、関越道、東北道、常磐道、東関東道の6つの高速道路が圏央道で繋がった。今回の開通により、新たな広域ネットワークが形成され、これまでの開通によるストック効果に加え、さらなるストック効果の発現が期待される。



写真-1 境古河 IC



写真-3 常総 IC



写真-2 坂東 IC



写真-4 つくば中央 IC

1 開通区間の概要

今回開通区間は、平成7年3月に都市計画決定され、以降、設計・測量などを経て、平成12年度から用地取得に着手し、平成18年度から本格的な工事に着手した。平成27年9月の関東・東北豪雨による水害等により、開通時期の見直しがあったが、平成29年2月26日に開通となった。

当該区間は平坦な地形を通過し、盛土構造、橋梁構造が主体となっている。

また、今回開通区間も含め、東北道以東の圏央道は、暫定2車線で開通しているところである。

さらに、今回開通区間では、わかりやすい道案内の実現に向けて、我が国で初めて高速道路ナンバリング標識（図-3、図-4）が設置されることとなり、開通式典において、ナンバリング標識の除幕式も執り行われた（写真-5）。

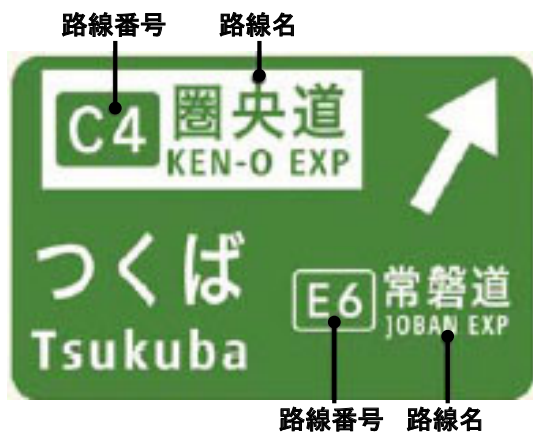


図-3 高速道路ナンバリング



図-4 今回開通区間で使用される表示



写真－ 5

2 開通の効果への期待

これまでに開通している IC 付近では、大規模商業施設の立地や、工業団地への工場進出が進んでいる。また、地域の通過交通が排除され、交通事故の減少等にも寄与しており、様々なストック効果が発現している。今回の境古河 IC からつくば中央 IC 間の開通においても、これまで開通してきた区間と同様、ストック効果の発現が期待される。具体的には、以下の効果が想定される。

(1) 観光地へのアクセス向上による観光周遊の促進

今回の開通により、成田空港から関東各地の観光地（日光・那須、富岡製糸場、川越など）へのアクセスが向上し、観光周遊の促進が期待される（図－5）。富岡市世界遺産部観光おもてなし課からは、「これまでの圏央道の開通で神奈川方面とのアクセスが向上し、首都圏からの観光客が増えた。境古河 IC ～つくば中央 IC 間の開通により、成田空港からの外国人観光客や茨城県、千葉県からの来訪者が増加することに期待している。」との声がかかれており、自治体からも圏央道開通による観光への効果が期待されている。



図－ 5 成田空港から各観光地へのアクセス

(2) 物流施設・工場の立地による生産性向上

圏央道（東名高速～東関東道）沿線には、約 1,600 件の大型物流施設が立地している（図－6）。今回の圏央道開通により、モノの移動が活発になり、生産性が向上する可能性がある。特に茨城県では、圏央道開通等を見込んで、工場の立地が著しく進んでおり、工場立地面積は、平成 25 年から平成 28 年まで 4 年連続で全国第 1 位となっている。さらに、茨城県内の沿線市区町村では、工業団地等の土地区画整理事業等の取組も進んでおり（図－7）、更なる企業立地が期待される。



図－6 圏央道沿線の大型物流施設の立地状況

茨城県内の圏央道周辺市町村の土地区画整理事業



■施行中の土地区画整理事業※2一覧

地区名	市区町村
1 片田南西部	古河市
2 萱丸	つくば市
3 島名・福田坪	つくば市
4 上河原崎・中西	つくば市
5 中根・金田台	つくば市
6 阿見吉原	阿見町
7 五霞インターチェンジ周辺	五霞町

- ※1: 古河市、五霞町、境町、坂東市、常総市、つくば市、土浦市、阿見町、牛久市、龍ヶ崎市、美浦村、河内町、稲敷市(茨城県圏央道産業複合基本計画※3の集積区域)
- ※2: 住宅地形成、駅前市街地形成を目的とした土地区画整理事業を除く
- ※3: 茨城県圏央道沿線地域産業・交流活性化協議会※4が圏央道の開通を契機に、企業立地の促進等により産業集積地を形成、沿線地域の活性化を図るため、平成20年3月に策定した計画
- ※4: 茨城県と県内の圏央道沿線13市町村(土浦市、古河市、龍ヶ崎市、常総市、牛久市、つくば市、坂東市、稲敷市、美浦村、阿見町、河内町、五霞町、境町)及び大学、研究機関、商工会等によって構成

図－7 茨城県内の圏央道周辺市町村の土地区画整理事業

3 現れ始めたストック効果

水戸・偕楽園の梅祭り（開催期間：平成29年2月18日～3月31日）の来場者からは、圏央道を利用により、所要時間の短縮を実感したとの声をいただいております。ETC2.0データを解析したところ、八王子JCTからつくばJCT間はこれまで都心経由で約100分かかっていたものが約85分となり約15分短縮していることが確認された。（図-8）

また、水戸観光協会からは「去年に比べ今年の梅祭りの来場者は多い、との声がよく聞かれます。天気、気温など天候に恵まれたこともあります。圏央道の開通も要因の一つと考えています。」とのコメントをいただいております。今後の観光客増加に期待されている。

このように、圏央道の開通により広域的な観光交流が徐々に拡大してきている。

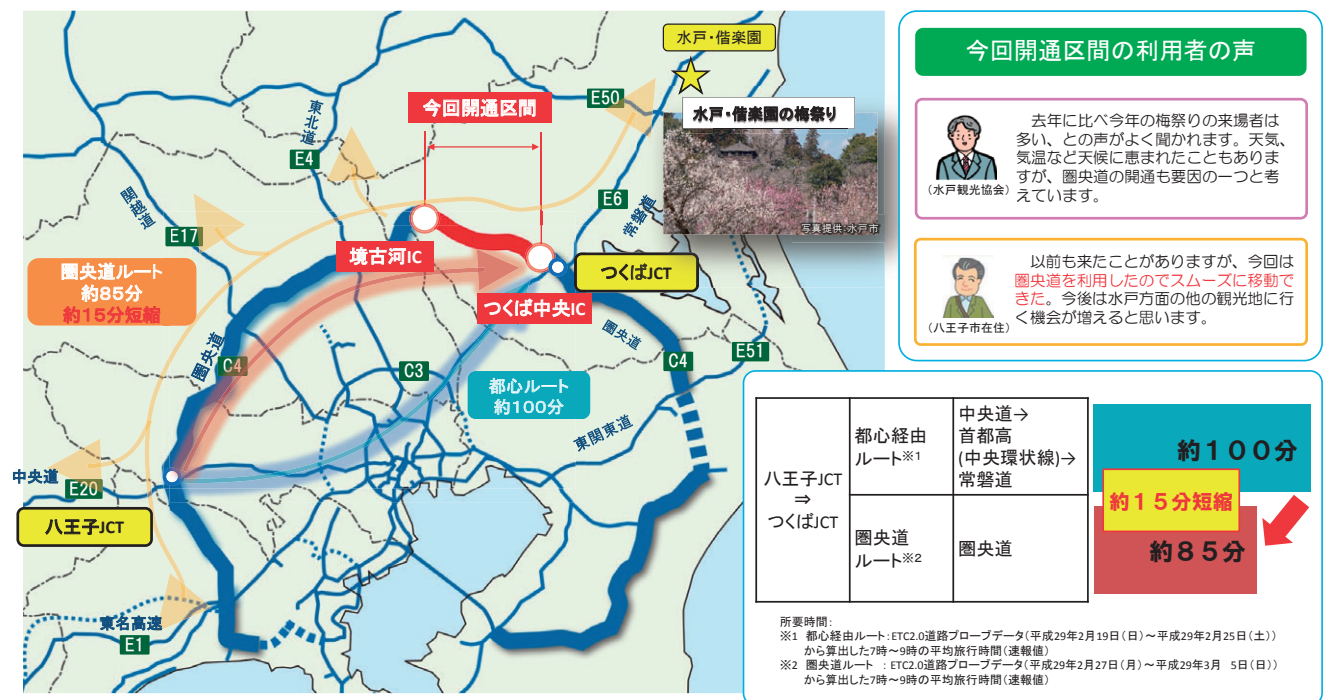


図-8 八王子JCTからつくばJCT間の時間短縮

おわりに

圏央道は都心部への交通の適切な分散を図り、首都圏道路交通の円滑化などを目的としているほか、物流の効率化や観光エリアの拡大などに伴う地域経済の活性化に寄与するものと期待されており、開通している首都圏各地においては、既にストック効果として発現してきている。

今回の開通により、さらなるストック効果が発現されると想定される。引き続き圏央道の整備効果として検証を続けていきたいと考えている。

最後に、今回開通できたことは、貴重な用地をご提供頂いた地権者の皆さま並びに地元の皆さま方のご協力の賜物であり、改めて、感謝いたします。圏央道が首都圏の沿線地域の有益な社会基盤として、大いに有効活用されることを願っております。